二五五　谷村の里芋芝居についての報道

明治二七年（一八九四）一〇月

●谷村の里芋芝居

郡内谷村の青年は、日下谷村座にて陸海万々歳軍資献金里芋芝居と云ふ奇的烈の芝居を興行中の処、毎夜大入にて木戸銭計りも既に百

二五六　谷村町福音同盟会の演説会報道

明治三一年（一八九八）四月

●谷村町通信（廿六日附）

福音同盟会演説の模様

此程谷村座に於て開会したる同演説会は、其当時五日間当町寺院に於て、真宗一等学師小栗栖香頂氏仏教演説及説教ありて、一般に宗教心を喚起せし折柄とて未曾有の盛会なりき、聴衆無慮五百有余名、主会者分部盛光氏開会の趣旨を述べ、次で谷村教会牧師米山定昌氏、内地雑居に就てと題し、吾人人類は洋の東西を問ず皆神の子なれば、人類悉く兄弟なり、愛は此兄弟間に均一に行ふべくして、四千万同胞にのみ限るべきにあらず、内地雑居は目前に迫れり、吾人の用意は博愛心を養成するにあり、狭愛心は往々其国を害することあり、清国の独逸宣教師殺戮事件、本邦の露国皇太子殿下負傷及び李鴻章負傷事件の如き実例を引用し、次に勝沼教会牧師加藤秋真氏第二維新の福音と題し、王政復古を第一維新とし、中外雑居を第二維新とし、来る所の福音は敬神人愛なりと説き、最後は福音同盟会特派員神学博士本多庸一氏にして満場万歳を唱へ拍手を以て迎ふ氏先づ初対面の挨拶をなし通俗神道一班との演題を説明し、本邦古来敬神の因襲あるは基督教と同主義なる所以、万物の造主なる神に霊なれば拝するのも亦霊と真とを以て拝すべきなりとの教訓を説き、最後に三大教の特性を包含したる一話を以て聴衆の判断に供したり、其間一時半聴衆をして充分の満足を得せしめたり、開会中二、三僧侶が暴言罵言を以て妨害せんとせしも、他の聴衆に制せられ半にして止む、散会せしは午後十一時、因に記す散会後信者一同谷村教会に集まり、当地方人民の為め祈祷会を開き、特に妨害者の為め熱心祈祷せしと云ふ

（明治三一年四月二九日「山梨日日新聞」）

【解説】 この演説会の記事のなかに谷村教会のことが記されている。谷村教会には「谷村教会四季役員会記録」が明治二九年七月から始められているというから、教会が出来てすぐにこうした演説会がおこなわれているのだろう。

二六二　谷村座の琵琶会についての報道

明治四一年（一九〇八）三月

●谷村座の琵琶会

南都留郡谷村町の有志は、東京健児館長の河合鶯我を招き、昨夜谷村座に於て薩摩琵琶会を催したる由なるが、番組は台湾入、常陸丸、石童丸、橘大隊長別れの国歌、河中嶋にして又土佐派の剣舞は日出国、児嶋高徳、本能寺、棄児、残月、白虎隊、外数種なりしと、尚ほ一昨夜は谷村町長安寺に於て開催せしが、非常に盛会なりしと云ふ

（明治四一年三月一九日「山梨日日新聞」）

二六六　谷村の素人義太夫についての報道

明治四三年（一九一〇）四月

●谷村の素人義太夫

南都留郡谷村町には魁連と称する素人の義太夫団体あり、団員は何れも天狗の鼻揃ひなるが、去る十三・十四の両夜同町谷村座にて温習会を催し、尚余興には谷の家芸妓の手踊及び置時計、反物、提灯等の福引景品を出したれば、両夜とも割返る大入にて天狗連の鼻は愈よ高くなれり

（明治四三年四月一五日「山梨日日新聞」）

二七〇　谷村座の演芸についての報道

明治四三年（一九一〇）四月

●谷村座の演芸

南都留郡谷村町谷村座にては、去る二十三日夜より壮俳菊田一座にて毎夜大入なるが、同地の観客は他に比し喧騒を極むるより演芸の妨げともなれば矯正したしといふ者あり

（明治四三年四月二九日「山梨日日新聞」）

二七一　谷村座の盛況報道

明治四三年（一九一〇）五月

●谷村座の盛況

目下谷村座に興行中なる菊田兼一一行の「小柳富代」並に旧派「道中双六」「寺小屋」「千代萩」等は新旧交々殆ど幕無しにて演ずる上、去二十九日夜より連引券を出して一層の大入を極め居れりと

（明治四三年五月二日「山梨日日新聞」）

二七三　谷村座の興行についての報道

明治四三年（一九一〇）八月

●谷村座の興行

谷村町谷村座にては、去る三十日夜より東京品川覆面演劇一座の「天の巌閉」を興行し居れり

（明治四三年八月一日「山梨日日新聞」）

三九四　谷村座での社会主義者による講演会報道

大正九年（一九二〇）一一月

社会主義の
第一着　宣伝
十九日谷村座にて

例の社会主義連盟にては、本県下に同主義の宣伝を為すべく其第一着手として、来る十九日午後七時より南都留郡谷村町谷村座に於て思想問題に関する講演会を開催する由、弁士として堺枯川氏を始めとし、山崎今朝弥・岩佐作太郎・加藤勘十・島中雄二の諸氏出演すべしと

（大正九年一一月一八日「山梨日日新聞」）

【解説】 山梨県での社会主義に関わる思想問題についての講演会としては最も早い時期のものである。堺枯川は利彦で、社会主義者として著名、山崎今朝弥は労働問題に詳しい弁護士、岩佐作太郎はアナーキストとして知られ、加藤勘十はシベリア出兵後に普選運動・労働運動に参加し、島中雄二（雄三カ）は社会運動家である。

三九五　谷村座での演説会結果報道

大正九年（一九二〇）一一月

無事に済んだ
社会主義
の演説会
＝郡内谷村に於ける

南都留郡谷村町、谷村座に於て十九日開催された社会主義の演説会は、定刻迄に約六百名の聴衆あり、弁士としては堺利彦、山崎今朝弥、加藤勘十、近藤憲治諸氏出席したが、当日県高等警察課より若林課長特に出張し、長田谷村署長は巡査数名を率ひて臨監し大に警戒を加へたが、弁士は何れも社会主義に関する学術上の意見を述べたに過ぎず、山崎氏は思想上の取締に関し演説する筈であったが、一言も述べず社会主義者の演説会としてはあっ気ない程平穏無事に済み、一行は昨朝帰京したという

（大正九年一一月二一日「山梨日日新聞」）

【解説】 堺利彦ら社会主義者の演説会に約六〇〇名も集ったというのは、盛況であったというべきであろう。

四三五　若松館と谷村座の活動写真上映競争報道

大正一一年（一九二二）六月

活動見るなら谷村へ御座れ
二館が競争で大安売

南都留郡谷村町には活動定設館は第一若松館丈で、日活と結んで相当に入りがあり、映画も五日毎に取かへて居たが、吉田に新設された寿館が、若松館の写真が変る毎に、二日間定期出張して谷村座で興行するので激烈な競争が行はれて居る。若松館は写真を十五巻も見せてただの十銭、それに対抗して寿館は入場料は二十銭であるがサイダーを一本宛呉れる、喜ぶのはお客様だ、梅雨期もいとはずつめかけて二館共連夜満員の盛況で、館の方でも寿館は松竹から、若松館は日活から、甲府以上の大物を取り寄せ、此所日活と松竹の競争映写の観がある

（大正一一年六月二二日「山梨日日新聞」）

【解説】 谷村町の谷村座（吉田町の寿館提供）と若松館の活動上演をめぐっての競争。活動写真の常設館が県下で始まったのは明治四四年のことで、本格化するのは大正半ばからである

四三六　谷村町若松館などの興行報道

大正一一・一二年（一九二二・二三）

谷村若松館

曩に報道せる谷村若松館対寿館の両活動写真館の競争は益々激しく、遂に若松館は、旧劇左甚五郎六巻・新派恋に泣く女四巻・活劇フェドラ六巻を十銭にて見せ、先着者二百名には二十五銭以上の物品を進呈すと

（大正一一年七月三日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

十八日より凸坊漫画鉱山帰り、滑稽空中寝台各一巻、連続活劇戦闘の跡三巻、旧劇御三家三勇士六巻、新派悲劇恋衣全四巻を映写す

（大正一一年七月二〇日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

新派落潮、旧劇柳生又十郎、連続大活劇戦闘の跡、喜劇家政婦等を映写

（大正一一年七月二三日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

今二十八日より、旧劇毛谷村六助九巻、新派松風村雨五巻、連続戦ひの跡四巻、滑稽ロイドの根気一巻、漫画凸坊二挺ピストル一巻を映写す

（大正一一年七月二八日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

二日より旧劇神崎与五郎五巻、新派桜の光五巻、連続戦闘の跡四巻、外に余興として浪花節あり

（大正一一年八月三日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

今十一日より新派悲劇涙の舞台五巻、旧劇車丹波守五巻、連続大活劇戦闘の跡四巻、漫画凸坊探偵の巻一巻を映写す

（大正一一年八月一二日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

十一日より漫画凸坊の画帳一巻、新派博士の家七巻、連続見えざる手四巻、旧劇御吉野おさん四巻を映写す

（大正一一年九月一二日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

二十六日より新派侠艶録六巻、旧劇小栗判官六巻、連続見えざる手

四巻、喜劇地獄極楽一巻を映写す

（大正一一年九月二八日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

十一日より喜劇外套連続無敵エルモ、新派罪の母、旧劇宮本武蔵、漫画凸坊の金堀上映

（大正一一年一〇月一二日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

今晩より喜劇チャプリンの富豪一巻、新派涙の日記三巻、一喜活劇、海底の国宝四巻、一旧劇尾張三郎丸全十二巻の内六巻上場、連続活劇無敵エルモ四巻等を映写す

（大正一一年一〇月二八日「山梨日日新聞」）

無検閲の活動写真

＝谷村にて映写す＝

南都留郡谷村町活動写真常設若松館は、前月来日本活動株式会社作新派劇写真を県保安課の検閲を受けずして映写し、譴責されしが右の行為は解釈の如何に依りては公文書偽造と認め得可く、本県活動写真検閲に就ての一問題なり

（大正一一年一一月三日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

昨日より新派老僧と芸妓五巻、旧劇戸田新八郎七巻、連続活劇赤手袋四巻、同虎の足跡四巻、喜劇デモ飛行機一巻を映写す

（大正一一年一二月一五日「山梨日日新聞」）

谷村座

二十五日より、新派悲劇波枕五巻、西洋劇孔雀夫人五巻、旧劇怪物退治武勇伝六巻を映写中なり

（大正一一年一一月二九日「山梨日日新聞」）

谷村若松館

今二十一日より実写牧牛一巻、オヤ足は？一巻、旧劇梁川庄八五巻、新派悲劇金色夜叉六巻、連続活劇赤手袋四巻、同虎の足跡四巻を映写すと

（大正一一年一二月二一日「山梨日日新聞」）

谷村座

谷村座では、今十三日から、滑稽ロイド下を見ろ一巻、連続活劇第五、グライド十三四巻、新派悲劇目なし鳥五巻、旧劇平井権八六巻を上映する

（大正一二年七月一三日「山梨日日新聞」）

【解説】 若松館が開業したのが、大正一〇年のことである。前項の史料で紹介したとおり、谷村座との競争が激しくなったが、活動写真の興行は大受けに受けた。ここに収録したのは山梨日日新聞の大正一一年の後半期分で「演芸たより」という若松館や谷村座での活動写真の上映案内である。